

135周年記念誌発刊に当たり

磯野 可一

千葉大学医学部百周年記念誌が出来上がってから、35年の月日が流れ、ここに135年誌の発刊が企画され、過去を顧みて、未来に思いを馳せることは極めて意義あることと思います。特にこの20～30年間に於ける世界の変貌は、100年の歴史の変遷が一度に濃縮発露された如き様相を呈し、政財界、企業界を問わず教育界、医療界にも激変を招来し、多くの分野で崩壊寸前の状態に至っており、抜本的に且つ早急な対応策を打ち出す必要があります。

ここで百年誌を振り返り見るとき、月日の流れはあまりにも早く、数々の出来事も遠いとはるか彼方のことの如く静かに立っており、私たちの記憶からは薄れ去りつつあります。しかしその一つ一つの出来事も、過去に起こった時点では思いもよらない大きな出来事であり、過去の歴史という航海は決して平穏なものではなく、繰り返す荒波にもまれたことも多く、これらを乗り切るために多くの先人のたゆまぬ努力により今日の千葉大学があることを痛感させられます。

私が千葉大学にお世話になり、約50数年、半世紀以上の月日が流れており、この百年誌の中においても、その一部に私の存在があったことを思うと不思議な思いがします。このたびの135年誌においては、最近の35年では正規のスタッフとしてこの歴史に参画したことになります。千葉大学第二外科学教授として、そして病院長として、最後は学長として

医学部の、そして大学の航海に皆様と共に真剣な努力を続けたといえます。第二外科の教授としては、日本外科学会の会長を務め、千葉大学に外科学教室ありの名をとどめ、病院長としては常置委員長として文部省の直接相談役として、特定機能病院、高度先進医療、卒後研修問題への取り組みを積極的にこなして来ました。

私が学長となった平成10年には、旧6大学では総合大学創立50周年を向かえ、その準備が開始されておりました。同時に全国的には大学改革に対する動きが見え始めていました。大学審議会で「21世紀の大学像と今後の改革方策について——競争的環境の中で個性輝く大学——」という答申が出されてから、その機運は急速に高まってきました。

そのような最中、平成11年に千葉大学では50周年記念事業が執り行われる事が決定しました。私が学長となり先ず、全学的規模で挙行された最初の事業でありました。思えば、財政の緊迫した状況下であり、各企業、先輩、同門の方々のところに募金集めに奔走した事が思い出されます。

顧みますと、千葉大学は昭和24年（1949年）5月31日に新制国立総合大学として出発し、それから数えて50年後の平成11年（1999年）11月5日に50周年記念式典が政財界、社会人、そして当時の教職員の暖かいご支援と情熱により盛大に挙行されました。（写真1・2）



写真1



写真2

式典の冒頭の挨拶で私は次のように述べています。「今、私たちが目の当たりにする千葉大学のキャンパスは、半世紀に亘る先人の並々ならぬ努力の賜物であり、第十一代の学長として創立50周年という節目の時を迎える事は身に余る光栄であり、同時に大きな責任を感じている。過去の歴史から真に重要なものを求め、その土台の上に新しいものを築く事が重要である。大学に求められる不易と変改の部分を見つめ、自らの責任において教育、研究の改善と向上を図り、明日に向かって育ちゆく有為の人材を育て、真理を求め、社会に、そして人類の幸せのために大きく貢献するために尽力したい。」との抱負を述べさせていただきました。

当時、国立大学の独立行政法人化の問題は、行政の中でも賛否両論の議論が行われていました。しかし、平成11年4月「国立大学の独立行政法人化については、大学の自主性を尊重しつつ大学改革の一環として検討し、平成15年までに結論を得る。」と閣議決定され、以後、文部省の基に、国立大学協会を中心にして、大学共同利用機関、私立大学、公立大学、経済界、言論界党の関係者間で真剣に討議検討が重ねられました。

其の翌年の平成12年7月には独立行政法人制度のもとで、国立大学ならびに大学共同利用機関を法人化するために、文部省に調査検討会が発足されました。そして、平成13年6月経済財政諮問会議では「今後の経済財政運営及び経済社会の構造改革に関する基本方針」（骨太の方針）のなかで「国際競争力のある大学づくりを目指し、民営化を含め、国立大学に民間的発想の経営手法を導入する。とくに国立大学については、法人化して、自主性を高めると

共に、大学運営に外部運営家の参加を得、民営化を含め民間的発想の経営手法を導入し国際競争力のある大学を目指す。」としてあります。

その間、紆余曲折を重ねながらも、平成14年3月「新しい（国立大学法人）像について」の最終報告が纏められ発刊され、平成16年国立大学法人化が発足されました。

この法人化による大改革は明治の改革、昭和の改革に次ぐ大改革であります。質的にはこれまでに無い全く異質の大変革といえます。

それ以前の平成10年の私の50年誌の「序」を読み返してみますと、次のような文があります。

「—— 21世紀を前に現在行われんとしている一大改革の根底には、真の教育の概念よりも、経済改革がより大きな比重を占めている点に憂慮せざるを得ない。そしてクラーク・カーが「アメリカ高等教育試練の時代（1990～2010年）」の中で指摘している問題点を強調しています。

1. 政府からの財源の獲得が益々困難となる。
2. 高等教育機関が国家および産業部門に組み入れられるにつれ知的独立が失われつつある。
3. 政府の姿勢は、項目ごとの統制よりも、全般的な誘導へと変化している。高等教育はますます市場経済化へと進む。
4. 政府は「純粋学術」から応用研究、技術訓練の方向に高等教育を誘導している。等」

さらに続きます。「—— 過去の歴史を顧みることは、単に過去を懐かしむ事ではなく、その歴史から真に重要なものを求め、その土台の上に新しいものを築く必要がある。—— これまでの大学は、大学の自治のもと学問の自由と真理の探求の精神によっ

て、国の行財政に関する改革によって直裁的影響を受けてはならないとしてきた。この（大学の在り方）は、いまや大きく変わろうとしている。

独立行政法人化の問題まで急浮上しているのが現状である。教育の根幹を揺るがす改革は、国家百年の大計を念頭に置いて展開されなければならない。――」と述べています。

このことは今でも私の頭の中にははっきりと締めくくられており、医学部135年誌の中においても、医学部の真理の探求と将来に私たちが求めるものとして語りたい思いであり、ここに重複する事を敢えてお許しいただきたいとおもいます。

大学が法人化されて一年余分に学長職を引き継ぎましたが、以上の思いから千葉大学独自の改革を進め、これを軌道に乗せ国の財政改革の焔りを出来る

だけ少なくし、千葉大学としてこれまでの不易の部分をしっかり和堅持して行きたく思ったからであります。

歴史はその時点時点で現存する教職員の考えにより、最善が尽くされており、過去があり、現在があり、そして未来があります。

135年誌の中で活躍された方々のご苦勞に感謝し、つぎの歴史に参画される事の重大さと責任をしっかりと認識し、情熱と勇氣をもって、千葉大学のそして医学部の発展高揚のために、ご尽力されん事をお祈りします。

135周年記念誌の編纂に携わってこられた方々のご苦勞に感謝申し上げます。

（いその かいち）

（元学長：平成10－17年）